



韃靼勝敗記

特  
13  
2175  
1





13  
2/75

拈

海外路卷説

韃靼勝敗記

墨堤舎粹



詩を声阿多如畫画の象  
安子の詩も如文と世なり  
實ふ如る詩も如るなり  
なるものなりと如る画を  
阿ハ多禮と如るなり



遠く緇の象と考と好了  
祝聴りこゝ〜世文は是れ  
其もく昇平〜久〜  
民人枕をさ〜と腹は痛  
干戈〜と意欲〜其〜

四ノ壺

高〜貴のたまは此の秘を  
久〜多 吾も此治世の志  
思ひんを心〜身を修  
吾も其職を修〜み  
〜此 祿り〜





ロノ二





大清  
 智勇將 黑龍城主 司馬翼 シマノリ  
 同夫人 幹氏 ツグノ



大清  
 謀臣 統州巡撫 趙元宗 シウエンソウ  
 大青  
 猛將 艾丹城主 孟良 メンリョウ





韃靼英雄烏斯坦  
ウスタンの子

喇嘛勇臣火單  
ウスタンの子

火單嫡子單殺得  
ウスタンの子



喇嘛奸臣墨兒蘭  
ウスタンの子

口ノ四



韃靼勝敗記惣目録

卷之一

韃靼地名の事

喀爾喀城中浮定の事

韃靼勢王統城と攻る事

司馬翼智計韃靼勢と川中に溺る事

卷之二

喀爾喀王麻辣拔兒と招く事

麻辣拔兒喀爾喀王の陣と来る事

黑龍落城の事

黑龍の城中家奴の酒宴の事

艾丹城攻め京勢後詰の事  
羅金德韃の陣と夜討とる敗軍の事

卷之三

艾丹落城の事

吾仲良血戦討死の事

北京英吉利へ加勢と乞ふ事

趙元宗南京と攻る事

趙元宗南京勢と破る事

英吉利勢英河にふ事ある事

李伯玉英國の軍艦と奪ふ事

卷之四



李氏後を扱けく山西勢と悩ます  
 後明勢奇討を欲く清の大軍と悩ます  
 英吉利勢再び敗軍の事  
 大孝友金復讐の事  
 墨里蘭火卓と欺討の事

卷之五

一 單毅得款討并小字古懐落後の事  
 一 鳳凰山の麓にて魏清討討の事  
 一 大清の陣中に卓毅得仇討の事  
 一 魏祖察爾察王後明小一味合体の事

目錄終

大清道光三十年十月廿八日  
 穆彰阿二臣論

任賢去邪人君之首務也去邪不斷則任賢不專方  
 今天下因循墮廢可謂極矣蓋治月壞人心日澆是  
 朕之過然獻可替否匡朕不逮則二大臣之職也穆  
 彰阿身任大學士受累朝知遇之恩不思共難共慎  
 同心乃保位貪榮妨賢病國小忠小信陰柔以售其  
 奸偽學偽才揣摩以逢主意從前夷務之興穆彰阿  
 傾排異己殊堪痛恨如達洪河姚瑩之盡忠有礙於



已必欲隱之者英之無耻喪良同惡相濟盡力合心  
似此固寵竊權者不可枚舉我

皇考大公至正惟全以誠心待人穆彰阿何以肆行  
無忌若使

聖朝早燭其奸則必立置重典斷不姑容穆彰阿特

恩益縱始終不悛自本年正月朕親政之初遇事摸

稜鐵口不言迨數月後則漸施其伎倆如嘆夷船至

天津初猶欲引者英為腹心以遂其謀欲使天下群

黎蠶食荼毒其心陰險寔不可圖潘世恩等保林則

徐則屢言林則徐柔弱病軀不堪錄用及朕派林則

徐馳赴粵西剿辦土匪穆彰阿又屢言林則徐未知

能否否偽言熒惑使朕不知外事其罪寔在于此至

若者英自外生成畏蕙无能殊堪託異前在廣東時

惟抑民以奉夷人罔顧國家如進城之說非明驗乎

上乖天道下逆人情幾致變生不測賴我

皇考燭悉其偽速令來京然不即于罪斥亦必有待



也今年著英召對時數言嘆夷如何可畏如何應度  
周旋欺朕不知其奸欲常保祿位是以喪盡天良愈  
辦愈彰直同狂吠尤不足惜穆彰阿暗而難知者英  
顯而易著然而貽害國家厥咎維均若不立申國法  
何以肅紀綱而正人心又何以使朕不負  
皇考付託之重歟弟念穆彰阿三朝舊臣若一旦置  
之重治朕心寔有不能忍着從寬革職永不祿用著英  
雖无能已極然究屬迫于時勢亦着從寬降為五品

頂戴以六部員外郎候補至伊二人以私欺上廼天  
下所共見者朕不為已甚姑不深問弁理此事朕熟  
深慮計之久矣不得已之苦衷余諸臣其共諒之嗣  
後京外大小文武各官務當激發天良公忠佐國俾  
平素因循取巧之積習一旦悚然即悔毋良難毋苟  
安凡有益于國計民生之大端者直陳勿隱毋得仍  
願師生之誼援引之恩守正不阿靖共余位朕寔有  
厚望焉布告中外咸使知朕之意特諭



右ノ如ク北京ノ新帝即位ノ肇メ奸臣ヲ論シ  
 叙爵ヲ換ヘ國政ニ震襟ヲ碎キ玉ヘ片一治一  
 乱ハ天ノ定數ニシテ何ゾ人カノ及グ處ニア  
 ラズ聰明英主ト虽ドモ是ヲ免ガレガルハ古  
 今相同ジ咸豊爺ノ賢ナルハ此勅書ヲ以テ推  
 テ知ベシ

墨堤舎敬白



韃靼勝敗記卷之一

○韃靼地名の事

柞大韃靼と云ハ中北亞細亞の後名にして其部内數十  
 部あり其皇國は屬するあり支那は屬するあり魯西  
 亞は屬するあり又其支那と魯西とを結ぶて支那及び魯西  
 に屬せざるの國七ツあり其内まて教皇ふらきて其國王  
 あり魯西亞韃靼は支那と魯西とを結ぶて支那に屬する韃  
 靼と教皇ふらきて其國を朝鮮滿洲蒙古喀喇喀薩哈  
 連一名哈刺土部なり是と指して支那韃靼と云人皆皆韃  
 靼と云ふ長孫と使ふ其國王と名孫して大汗と云その中に





後あり東馬純は界一山ハ雅克薩城小西り都中江二の  
大府あり夷一遼東と云先二在赫才三と号杜支加爾と云  
左清言征屯新覺羅成をけ後ありの守古増小降延ありと  
成者一初り僅小百又十人よて鳳凰山小岳を奉て後中  
と一統一都と少弟又建てより久しく志平打邊江に小今  
咸豐帝の時よむく清の王威衰へ上りその擧る方安更  
る義と能一仁政と能て虚改と能行しふ天の志り  
志と能一義と能と慕るよ洪武純りやう 李伯玉りやう 張  
志と能一義と能と慕るよ洪武純りやう 李伯玉りやう 張  
志と能一義と能と慕るよ洪武純りやう 李伯玉りやう 張

多二一

押く南京府と攻えけ石を新都と一年号と天徳とて  
風俗衣履も支朝小復しきう仁政と能一武威と能法四  
又赫きその徳と慕るよ下小弛集る者真ふよいと云  
ありと是小依く内地十八省のむくの徳候より北系へ右  
る子橋の苗と挽よりも控察一帝と始め欽差使大臣大  
る勢き軍儀淨定匿くたりよは後あり一の都府遼東王  
平打洲来しと能粗の内喀爾喀王りやう 又連を企と黒  
龍城と攻るの屯と依へり

○ 韃靼勢王龍城と攻る

喀爾喀王りやう 志と能一義と能と慕るよ洪武純りやう 李伯玉りやう 張



清の苛政小国弱せしとけ以中華小強乱ありて深後  
禁これに國債を困窮し老を養ひ初と為しむと漸む  
社者の家業を棄て他を乞り老弱の餓死をうふむる  
る能く喀喇喀王 大不嗟嘆一咸豊二年辛亥の  
冬我族後の片を集めてお後して曰我小国代を清乃  
旗の小属をと黄とる今清の苛政小国弱し既小下民  
餓死と免まざるにむる君君とるはははははは古賢の戒あり  
て武王紂と討ども及運の名は仁と賊ふ者を一丈とらふ  
一丈討と征とと却とく英名と後世よまを我家元よりを  
清の三代相豊の主人小ありど時世よとりて孫小侯する

卷二二

の〜院小を清小は〜共又悪名を悪くんとりい匡〜この  
り氏と助け孫賊の清と討と威と海和をも棄がらんを  
歎ととむこれが一産の徳信一養も及たらん今君の命する  
と〜孫信小元より形ありなり思を立させありはははは  
意と抛ちちを〜後世と忠信の名をきさんとする  
者の面目なりと歎表表又形つまで口々これが喀喇喀王  
かろろを 大不収び汝等が心を海足せりけし一日も中  
考を母さんと採養一皮〜其后又諸信をきして軍後と  
あま〜馬兒空〜を〜と〜支那難航中の清は  
るる〜皆我軍の〜と清と怒むる〜とふ定せり去あが〜











睿嘯睿王うらみ軍勢ぐんせい五倍ごばい勝かちて加兒かゑ川がわ系けいと押出おしだすこれ  
ハ一味いまい合あ体のたい諸軍しよぐん我われ若わからうと馳ち集あつり軍威ぐんゐ日ひに盛さかに  
戦たたかひて多おほくの軍勢ぐんせいを潰つぶし倒たふし破やぶつたの勢いきさつひいて是こゝに  
とさして押おしあんとすけるこのとこ軍勢ぐんせい城しろ小せう支しへんれば城しろ代しろしろ司し馬ば翼よく  
翼よくと世よ又また少せう中ちゆうの大だい勇ゆう別べつののおちまははババカカも驚おどろくとも  
これとも先まづに北きた多おほくするまとの所ところへ是こゝに少せう防ぼう衛ゑいの用もちを  
とるまと日ひと経へるしう難なん難なん勢せい是こゝに城しろと押おしあるし司し馬ば翼よく  
半途たんちゆう小せう勢せいをおけけてて軍ぐん我われ小せう支しへんし勢せいをおけけとと経へる  
洪こう炮ほうと打うち掛か炮ほう煙えんのの末すえに納なむむるる子こ樂らくのの上うへに長ちやう槍しやうと  
うらうり殺ころすす合あひひて勝かち敗ひたれれとも日ひ已やままらら不及ふ及たん

五二五

で双方さうほう勢せいと引揚ひきあるる難なん難なん勢せい日ひと経へるしう難なん難なん勢せい是こゝに城しろと押おしあるし司し馬ば翼よく  
とと星せいども思おもひひのの代しろ司し馬ば翼よく元げん素そ勇ゆう別べつ遣けんくく休き  
小軍せうぐん勢せいももななららううとと女に々にも懼おそるる防ぼう衛ゑいのの上うへに長ちやう槍しやう  
ななららううとと果はるるとと軍ぐん勢せいとと皮かわめめ勢せい二に方ほう小せう分ぶんとと一いつ時とき  
喇ら嘛まとと軍ぐん勢せいとと皮かわめめ勢せい二に方ほう小せう分ぶんとと一いつ時とき  
攻せうめめとと押おしああるるに城しろ小せう支しへんし勢せいをおけけとと経へるしう難なん難なん勢せい是こゝに城しろと押おしあるし司し馬ば翼よく  
城しろと押おしああるるに城しろ小せう支しへんし勢せいをおけけとと経へるしう難なん難なん勢せい是こゝに城しろと押おしあるし司し馬ば翼よく  
とををめめ大だいおお下した知しりりととけけ様さまとと介けさんさん追おひひ追おひひて城しろ中ちゆうに付つ入いり



身を撃つる事と操死打振返さるるて一ツの廣野に馳出て  
行もをまんとする所は城方の別名若刺新と名を置て  
てをへおく小敷ふこの際小坂各々しく倭へを去りし  
後と往と戦へば難勢も踏ましく切をさしり小唐さ  
所をさすも尺地もあらず元南よりけ時城名の後跡より  
西洋流の天地は強業とて天地も裂るなりよお出に其  
玉を中と唱ふ事と飛来りて廣野の中は居ると為りし  
ひとりの地雷大堆中より横發し大勢二三丁に飛布て  
難勢はふふと燒まきりし所より大堆の傍よりや又  
一ヶ所の地雷大堆發を振りと雖も死と願りし難勢

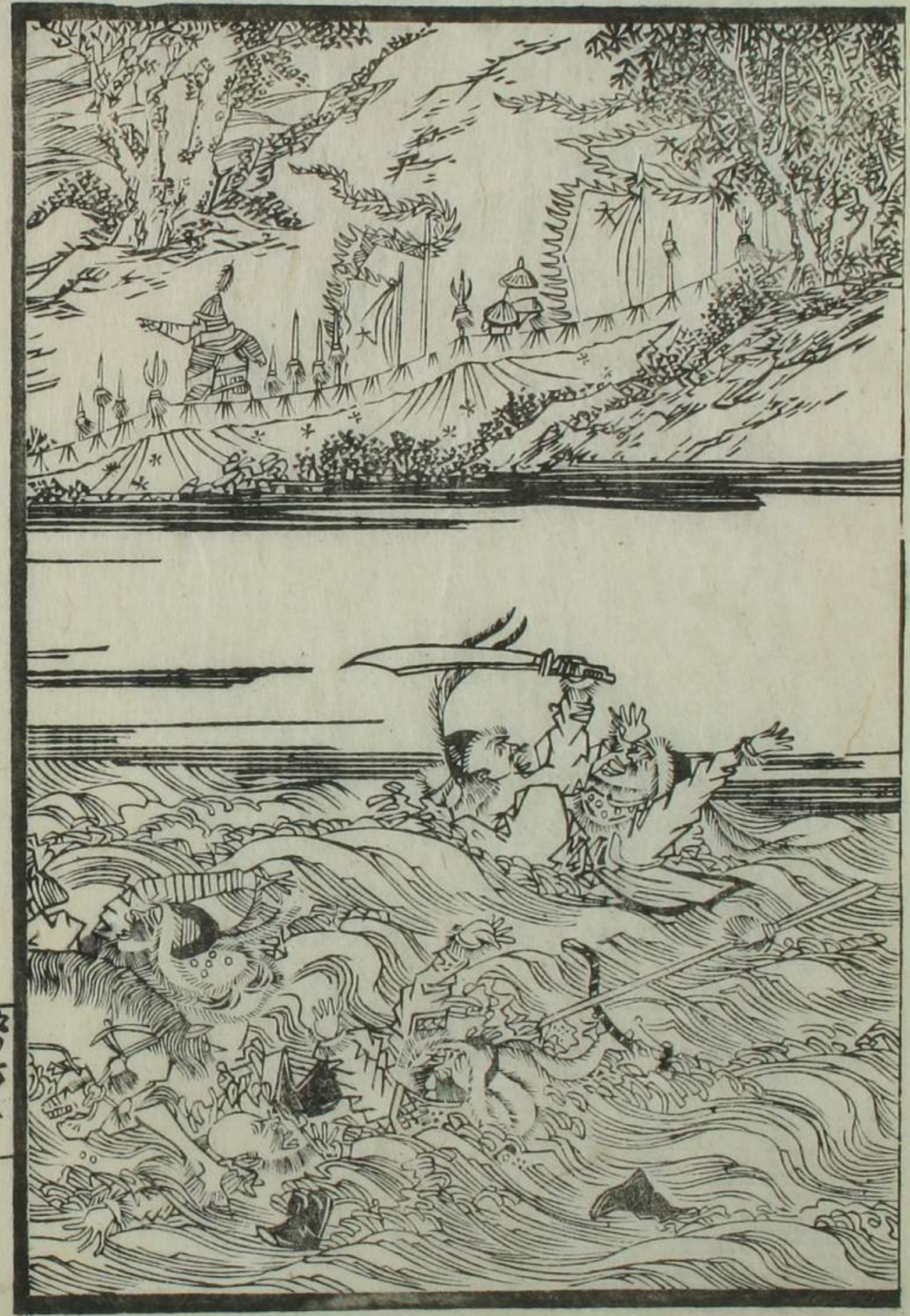
梅味方と劬し戦ふ又地雷大堆發都合十餘ヶ所の地  
雷大に廣野をめぐり大勢倍々熾るはばんと  
種くおのども幸廉爛して戦ふと種くはれ乱まきて敵  
をせんども城兵も大と踏て居る所種くはれ大筒を打  
撃るの種く後岡を化り勢とまきりて城か陣を又城の東北  
よりあたる一山の難勢難勢は掃ぐ攻勢は城名因とく  
射敵し地戦終りて指竹束と打控て是槍と更へ挑むた  
るるの隙ははるる所は城名の出強し陣西の遠後ろ九二  
三十ヶ所の大なるを得荒本を以て城は築き置るありし  
難勢も是れを以て思ふとも是れ軍勢と難勢し



あつた又決死大旗のゆへありとも及ぶるも赤くも高  
くは是等の心にも留む勇と勵一切伏兵休む痛  
血戦せしむ敵者偏り勝て一敵に色を奪勢を討て  
奮直り馬鹿らむも坤の風烈く官軍は彼二三十の  
言糧の上より胡椒あるのみ蕃椒の粉と散り撒ちし  
勢の西南に向つてをむる風より右の粉撒きされ  
鼻より入り咽喉を刺し目と用く事法は忠勇服と  
刃で一寸先の圍に敵兵と見せしむて返り突掛るを  
糧勢の留むるも右に左に小敵を打ち取りし馬翼  
よく智勇善法のにおるもよく返りしむる又敵

の西北より向ひし勢も同く先は牛皮指と手毎に  
おを脱矢とせしむる旗とて取小旗にけしむの大  
司馬也も勇と奮りしむる旗とて取小旗にけしむ  
り引に陣と返けしむる先は勇小を中勢軍の旗  
なるをせしむるしむる旗とて取小旗にけしむる  
経サ里計もをせしむる寒河とて幅七八里もあつた  
さ大河あり不思議なるる水僅小縁を渡さるりなる  
嶽若河の才途小踏苗まりて一寸も引くと返り戦ふ  
大河のなるる河原なるるは元小隊のありしむる  
自地と争く返りしむる力化の幾ひしむる返りし





五ノ八



時城名程も烈しく我子手にお尋と是一と一夜の狼煙  
閃めき揚りし共何の怪しき事とありしふまじり  
こそあま川と嘯くと信後り逆水天と衝たりに白波  
立て落来る城勢の途と果てまじりけ方の老より逆  
紐拾ひ程も早んとする所なり大水漲り来りス口流計に  
落入りしと周章あつめさしんとまきどもあつたより  
らやまき逆勢は下押流され溺れ死する者数と知  
む或はる別くして稀にゆるりありありを岩とくして  
溺る道もあまとも軍勢八九分と失ひし皆司る翼  
よく智儀より出て二軍共なりぬのどくぬぬ一逆勢と

矢あつたも殺ししりえれは毎に改る義勢撲ししは道  
陣とよけて勢つらふ木柵と信の逆勢の要害とぬ  
是二軍のおせと集めく評定をまじりも終めてお給の  
柄と死む者多く言と捲て款の司る翼よく智儀と  
柄は一向も出さ者多く度中あつてけく見くつらふ馬  
兎軍も群と抽てややう本國抗慶山の麓に麻練接見  
まじりとも一賢人ありし成長法古中華の長高りし階純  
りやふ村し草廬ふ所と潜め今北京の奇政と悪くと  
閑居し明君の安くと我軍の安くと付く病成となす  
くるの義長もまじり染と和らげ何ぞ居ん染もつらふ大軍師







